

H17-4-23

だいほうはちまん

参拝のしおり



大宝八幡宮千古の杜

関東最古の八幡さま

大宝八幡宮

〒304-0022

茨城県下妻市大宝667

TEL 0296-44-3756

FAX 0296-43-2286



あじさい神苑

お祓い(御祈祷)の御案内

◎厄除(厄祓) ◎八方除(方位除) ◎星除◎交通安全
 ◎財運招福(大宝が授かる) ◎事業繁栄◎家内安全
 ◎安産◎初宮詣(おみやまいり) ◎七五三詣◎病氣平癒
 ◎商売繁盛◎合格祈願(入試) ◎良縁成就◎大漁満足
 ◎必勝祈願◎旅行安全◎身上安全◎心願成就◎願解
 ◎名付け◎その他 又、地鎮祭等の出張祭典も申し受けております。

おまじりの仕方

まず手水舎で手と口を清めてから御神前に進みます。
 大神様におまいりする作法は「二拝二拍手一拝」と覚えておきます。

はじめに二度おじぎをして、次に二度手を打つ(拍手)、この時心の中で大神様にお願いごとをしたり、お礼をいったりして最後にもう一度おじぎをして終わります。



御祭神

誉田別命(ほんだわけのみこと)

応神天皇

足仲彦命(たらしなかつひこのみこと)

仲哀天皇

氣長足姫命(おきながたらしひめのみこと) 神功皇后

御本殿 (国指定重要文化財)

三間社流造。天正五年(一五七七)に下妻城主多賀谷尊経公が再建したが、本殿回廊の高欄擬宝珠によって知られる。

建ち上がりも高く、柱も太くてどっしりした重みを見せているが、これに比べて組物は小柄で複雑に組合わされ、桃山時代の地方色が濃くあらわれて派手な装飾は見られず落ち着いたたたずまいを見せている。

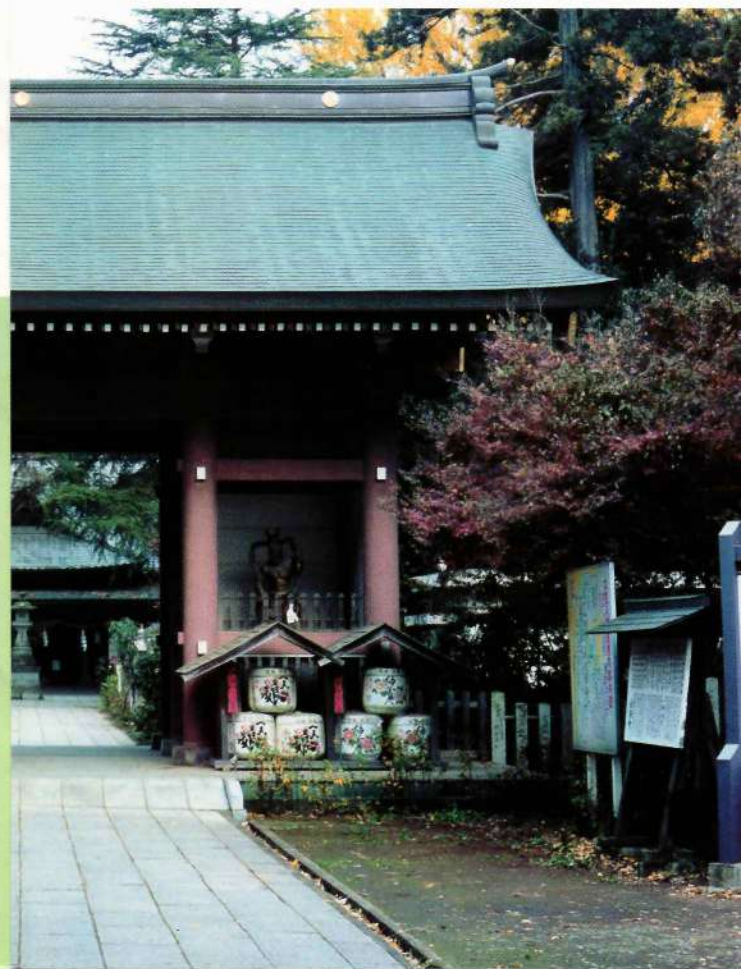
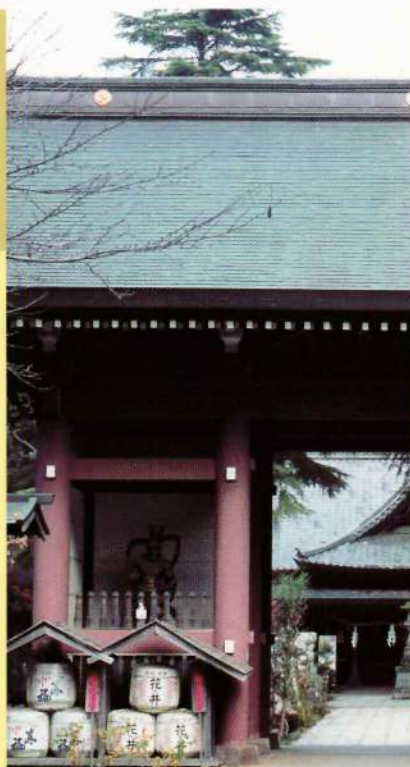


国指定重要文化財 御本殿

御神徳

八幡大神様は、その御代に治山治水・学問・漁猟・商工・土木建築・交通運輸・縫製・紡績、その他あらゆる殖産興業の途や、衣食住等人間生活の根源を開発指導された文化の生みの親神であると同時に、武の道をつかさどる神としても世に名高く、まさに一切生業の守護神であられる。

御霊験はいよいよあらたかにまし、大宝の御名に示されるように、財運招福の願い、厄除、交通安全、事業繁栄、家内安全、安産等の諸願を託す人が多く、日々の生活に限りなき恩恵をかがらせ給うなど、その御神徳は広大にして無辺である。



関東最古の八幡宮

大宝元年（七〇一）、藤原時忠公が筑紫の宇佐神宮を勧請創建したのがはじまりである。

天台宗の古い経文の奥書に「治承三年（一一七九）己亥七月二十二日の未時書了於常陸州下津間八幡宮書了兼智」とあるから、平安末期にはすでに八幡信仰が盛行していたことがわかる。

平将門公も戦勝祈願の爲たびたび参拝し、当宮の巫女によって新皇の位を授けられたと伝えられる。

「吾妻鏡」に下妻宮とされる、文治五年（一一八九）、奥州征伐平定の日、源頼朝公が鎌倉の鶴岡八幡宮若宮を勧請し摂社若宮八幡宮を創建した。寛政七年（一七九五）には光格天皇より額字及び御紋付幕を賜り、明治十九年には北白川宮より幣帛料が進納せられ、徳川家からは社領一一五石が寄進され代々の朱印が付されて現存すると共に、代々の大宝城主、下妻城主の崇敬がことのほか篤かったのは言うをまたない。

千古の連綿とした歴史の中で当宮から勧請された八幡宮は数えきれないが、東京深川の富岡八幡宮が著名である。



奇祭（火まつり）タバンカ祭

当宮の例大祭は「大宝まち」とも呼ばれて親しまれ、九月十五・十六日に斎行されるが、又の名を「七まつり」とも言い、七度にわたる祭事が執り行われる。

この中で最も特色のあるのが、九月十二日と一日

史跡 大宝城跡（国指定文化財）

境内は平安時代から南北朝時代にかけてあった城跡であり、西、北および東方の一部をもとの鳥羽の淡海（大宝沼）に開かれた東西二八メートル、南北五七六メートルの台地であり、東方も古い時代



には沼か湿地であったと思われるから三方断崖に面した要害の地であった。

ここに平清朝公が築城し、北を本丸、南を追手、東を搦手とした。応徳三年（一〇八六）下津間盛幹公が初代城主となり、約百年後四代下津間弘幹公にして下津間氏は終わりを告げた。源頼朝公の命により大宝城のあととは小山朝政公が治め、小山氏は代々下妻氏を名乗った。

六代政泰公の代に至り南北朝時代となり、興国二（暦応四）年（一三四一）十一月、常陸国司春日中将頼時公が若き奥良親王を奉じて小田城より入城し、東国における南朝方の拠点として、関城主宗祐、宗政父子と相呼応して義旗を翻したが兵糧不足と迫る寒気のため落城した。

御社殿裏に政泰公の碑が往時をしのんで建っている。

おいた十四日の夜七時からにはまる松明祭（タバンカ祭）である。全国でもここで見られない珍しい火祭で、その起源は古く、応安三年（一三七〇）に大宝寺別当坊の賢了院が出火した際に、畳と鍋ぶたを使って火を消し止めたという故事を戯曲化したのに始まる。

日も暮れ、七時の太鼓の音によって祭りが幕を開ける。

この祭は別名「冬瓜まつり」とも呼ばれるように冬瓜を神前に献ずるが、祝詞奏上の後、御神前に巴型に並べられた畳、その中央の鍋ぶたの上の素焼きの盆に御飯と冬瓜を一つづつ盛りつけ、玉串拝礼の後、太鼓の音に乗って祭の所役である白装束の氏子青年七名が畳や鍋ぶたごとカワラケを拝殿前にほうり投げる。カワラケを拾った人は病気をしないといわれ参詣の人々が競って拾いあう。

次に拝殿前に備えられた二本の大松明（麦わら製）に点火し、勢よく燃え上がる火を囲んで畳や鍋ぶたを力一杯石畳に叩きつける。この時に発するタバンパンという音からタバンカの名が起ったといふ。

この御神火で火をつけた松明を一束づつ両手に持った所役二名が振り回しながらかけまわる。それを

主な年中祭事

歳旦祭	一月一日
節分祭	二月節分の日
春の大祭（大宝まち）	四月十五・十六日
（下妻市無形文化財十二座神楽奉納）	
あじさい祭	六月下旬
夏越大祓（輪くぐり）	六月三十日
タバンカ祭	九月十二・十四日
秋の大祭（大宝まち）	九月十五・十六日
（下妻市無形文化財十二座神楽奉納）	
七五三祭	十一月中
大祓	十二月三十一日
月次祭	毎月一日

ずいかそうちうはちりようきよう
瑞花雙鳥八陵鏡(県指定文化財)

白銅製、一一、二センチメートル。文様表出のよい精良な一面である。鏡背文様は四分割して上下に瑞花を散らし、左右に鳳凰に対称的に配し、さらに周囲には羽をひろげた蝶を四方に対称的に置き、そのあいだに唐草を散らしている。
製造年代は十一世紀頃である。



丸木舟(県指定文化財)

イトスギ材、長さ六、〇五メートル、幅五八センチメートル。船首と船尾をとがらせている。江戸時代後期安政年間(一八五四―一八五九)に大宝沼干拓の際発見されたといわれる。

浅瀬で運搬用に使われていたものと考えられる。舟底は平たんに近い造りで、舷の内外とも精巧に削られているのが特色になっている。大木の幹をくりぬいて造った丸木舟はくりぶねともいわれる。見事な造りのこの丸木舟は、古墳時代後期のものと考えられ、ほぼ完全な形で保存も極めて良好、貴重な考古資料として高く評価されている。

(考古資料、土器群)

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・埴輪 天皇御下賜品 天座之太刀(源 頼朝公寄進) 唐鏡十葉(初代別当久仁法親王寄進) 五人張弓(多賀谷政経公寄進) 重藤弓 大太刀(鉄水子作、寄進) 甲冑



れうしやう
銅鐘(県指定文化財)

青銅製、高さ一〇八、一センチメートル、口径六〇、三センチメートル。

池の間(鐘の中間にあるのは方形の四区)の陰刻銘により、鐘は埼玉県岩槻市平林寺を開山した石室善玖が一三八七(嘉慶二)年鑄造。大工沙弥道善作とわかる。その後一四五六(享徳五、康正二)年猿島郡星智寺のものとなったことが三区以下の追銘で知れる。

この鐘は一五四七(天正二)年九月、佐竹氏の先手となった多賀谷 重経が、猿島郡へ出陣の際に戦利品として持ち帰り、大宝八幡宮に奉納したものと伝えられる。



「一つもの」の伝説

むかしむかし大宝沼に大きな白蛇が住んでいました。秋になると白蛇が大宝近郊の家の屋根に白羽の矢を立てます。その家では娘を白蛇に差し上げなければなりません。差し出さなければ白蛇の怒りにふれ大嵐大洪水などにより農作物がとれなくなり近郊の人々が集まって考えた末、「一つ目のワラ人形」を作って白蛇に差し出しました。白蛇はびっくりして大宝沼から姿を消してしまいました。その後は村々に豊かな稔が続いたとのこと。里人等はそれを記念して九月十五日の大祭の夜神事が行われ現在も続いています。
なお白蛇の霊を祀った青龍権現社が八幡宮境内にあります。

つばめと義家の伝説

だいはうはちまん

昔ばなし

昔、白蛇の山々に大爆発があり中禪寺湖水が干上がってしまったので、湖の主である龍が住家を失って大宝沼に移り住み、沼縁の人々や牛馬を手当り次第に食べてしまいました。村人たちは非常に困り、何か良い方法はないものかと悩んでいたところ、武術の達人である源義家が奥州征伐の途

次に戦勝祈願の為八幡宮に詣でたので、村人は早速龍退治を願いました。ころよくこの願いを聞き入れた義家は沼縁に立つて剛弓に雁又の矢をつがえ、沼面をはったとにらむと、その武人としての威厳に驚いた龍はあわてて逃げようと空に舞上りました。その時、つばめが多数群をなして現れ、龍を助けようと邪魔をしたので、義家の射た矢は龍の尾にあたってしまった。龍は、命からがら逃げ去ったという事です。
大宝の里には平和な日々がおとずれましたが、龍を助けたつばめに対して村人達はいへん怒って、以後里内には絶対に葉をかけさせません。尚、龍の尾が落ちた所には今でも「たつの尾」という地名が残っています。

